羽 根

龍夫

156

親たちが子供をしかる時

「お前は川から拾わ

れて来た子だ」「橋の下

108円

上の異界から訪れた神

指摘するように桃太郎や

たしかに多くの論者が

寸法師の話の原型も、

我が子が永遠に生きてほ

いという願望が付け加

まらず、子を失った母の、 川上から訪れた神にとど

供は川上に住まう神から

いう言い方の中には、子 から拾ってきたのだ」と

の授かりものであるとい

1部

いない。しかし桃太郎や という考え方にあるに違

のが私の考えである。 わったからであるという

一寸法師が神とはされ

ず「小さ子」にとどまる

リートで囲まれてしま

、日本人と川との交わ

川というものがコンク

の多くの子供と同じよう

の目を見ずに死んでいた

ょっとしたらわが子が日

かもしれない、またよそ

のは、そして何世紀もの

おとぎ話として庶民

鎌

倉

朝

どうも小の月には、

家の二階から、真正面

静

言ったのであろう。 侍」と言っていた。即ち を、下世話に「西向く 月のうち、小の月のこと を頭の字だけとってこう 一四、六、九、十一月 気にさわる人がおられ

たら先に謝っておくが、 月のお節句、 に富んでいるように思え 月のクリスマスと話題性 明るい夏の日差し、十二 ようだが、正月、三月、五 月、とはあまり言わない イメージがある。大の 、七、八月の

月にくらべて何となく暗 のしかかってくる。寒さ が、こっちの体がまだ慣 はまだ本格的ではない れていないせいもあっ 後ろの鈍色の冬空が重く を越すと、木の葉の色も て落ちスケスケになり、 褪せパラパラと枝を離れ に見える桜の樹が、十月

藤本宿 まある。 たりで、とまどう事もま おまけに、世の中は選

りする不順な天候もあっ 三十度近い夏日になった

て、それより近頃は急に

不可思議ではないか。全 挙一色で慌ただしい。大 るのはおかしい。国民全 部が選んだ議員なのだか 総理ひとりの考えで決め **職員の意向ならわかる。** 臣の政権事項と言うのも 解散総選挙が総理古

木版画

る。私自身六月生れでい たら、どうも裏に見え てならない。表裏で言っ 気がら、一年で六月が 嫌いかもしれない。 のいい時に行うのは理不 恣意と自民党の一番都合 ら、今回みたいに総理の 盡だ。国民に今一番人気

ともならないが…。

っても犬の遠吠えでは何 ないだろうか、いくら言

守る役割を担った「こど

説明し、会場内の安全を

町民にまちのルールを

のないのは総理本人では

育館が子どものまちに 初企画「こどもタウン葉山

小学校体育館に集まった 行われ、約3百人が一色 大滝祭りで10月8日 会が初めて主催した一色 「こどもタウン葉山」が 葉山町の一色大滝商店 の職場が設けられた。 学校・銀行・警察・ゲーム ン店・「こどもによる大 センター・カフェ・ラーメ 人の悩み相談室」など26 参加者はまず住民登録

無邪気な姿が見られた。

待を寄せていた。 もたちとの新たな絆に期

K

ふ化予定」とお知らせし

は話しています。

必等芸員 と葉山 「温度が

郷土愛を育て、防犯など どもたちの心に根付き、 たい。この取り組みが子

にもつながれば」と子ど

仏セーリングチームが園児らと交流

終了後には思いきり遊ぶ た」と話しながらも任務 し物が多くて大変だっ 女子らが大活躍。「落と も警察」では小学3年の

ちが自由な発想で「仮想 この企画は、子どもた の仕組みを実体験した。 ることにより経済や社会 ざまな職種で収入を得 で仕事を選び就職。さま て、遊びや飲食で消費す

どの出店があった。 学ぶというイベント。 で仕事をして得た通貨を のまち」を作り、その中 んだりすることで、社 使って買い物をしたり遊 メニューや雑貨販売な 同商店会からも自慢の 会の仕組みやルールを 会場では、大人は立

歌の歓迎を受けた。

ン」のエリアに、役場 入禁止の「こどもタウ

の存在の頼りなさへの不 子供の心の中には、自ら 安と恐怖が渦巻いていた に違いない。 子供というものは川上 狂暴な川であった。川は にすべてを奪ってしまう ると同時に、一瞬のうち けがえのない川であると 人々に子供をもたらすか

神々のイメージも、子を

念の中から生まれてきな 失った原始の母の暗い情 共にあったといえよう。

もしかしたら、日本の

うイメージのほかに、ひ て来て幸 らすもの たのである。川は稲に恵 れない不安定な存在だっ 同時に、 いをもた であると れていってしまうかもし いつまた

柳田国男=書斎で、昭和4年 (『新潮日本文学アルバム』より) ている。 田国男は『人を神に祀る 風習」で次のように述べ のではないだろうか。柳 み、我々と共に喜怒哀楽 した人たちを、その死後 定の期間を過ぎ、もし かつて我々も間に住

みの水をもたらす川であ 日本人の喜怒哀楽は川と を奪ってしまうかもしれ 同時に、いつまたその子 ない恐怖の川であった。 つ祈るということが、近 て一社の神に祭り拝み且 大よそ従来の方式に従っ くは一定の条件の下に、

とになるのであった。

幼くして、または日の

(神奈川歯科大名誉教授)

肩書をもたぬ気安さ秋高し

星月夜光り映して忘れ潮 草叢に売地の幟群とんぼ 猫抱きて庭に出づれば金木犀

よく来たと大仏の笑む秋の午後

小 羽 林 賀

(3)

たのは、彼らがただ単に の心の中に生き続けてき

ったが、つい最近までは

母親にそう言われて泣く がいないのである。また

ではそれほど聞かなくな りが崩れてしまった現代

怖が秘められていたにち

もしれないという母の恐

川で溺れ死んでいたか

を行い、ジョブセンター 写真。 船保育園(伊藤広子園 来目していたフランスの 士ら約80人と交流した= 長)を訪れ、園児や保育 鎌倉市大船の鎌倉市立大 セーリングチームのメン に向けた事前キャンプで 2020年の東京五輪 一約20人が10月12日、

るホールに入ると、 バーは、園児らが待機す 院を観光したというメン 鼓」、園児たちの元気な 育士らの「かがり火太 この日は鎌倉大仏高徳 の質問にメンバーがジェ

「セーリングって何」 リンピックでも金メダル スチャーを交えて解説。 たちに約束した。 さんは「ありがとう、オ て、統括監督のリオネル ダルのプレゼントを受け をとるね」と笑顔で園児 園児たちから手作りのメ

遂げた人は、先ず第一に る場合の条件として いう。そして神に祀られ な神」として祀られるこ 得た人がこの「あらたか 怒や喜の強い情を表示し リと称する方式を以て、 れ、従ってしばしばタタ 後に於てもなお想像せら 遺念余執というものが死 之にあずからなかった。 年老いて自然の終りを れてこれを祀ると「次第 の源流をさらに尋ねてい である。 本には子を失った母の悲 るが、私はそうした信仰 になる」ということがあ 祈願さえ掛けられるよう 繁栄という如き、個人の 信仰の中にはタタリを恐 社が多くある。日本人の しみがあると考えたいの くと、日本人の信仰の根 次第に平和の徳を発揮し **満神宮など怨霊鎮魂の寺** 日本には若宮八幡や天 後には富貴安楽子孫

い頃までの日本民族の常 日本固有のものであると の習わしであった。 そしてそれはおそらく

目を見ずに子供に というものが生まれたの 念の中からこそ「祈り」 有ると恐怖する。 因が、我が子のタタリに る。しかし同時にその後 るに違いないと幻想す 与えられて生き続けてい 子が、どこかで再び命を いは我が手から失われた ほしいと願望する。ある た母は、深い悲し ではないだろうか。 に続く多くの苦しみの原 で我が子が永遠に生きて た原始の母たちの暗い情

ラボした職業体験も考え は一来年は実際の店とコ 宮寺透雄商店会長(5) ウミガ 化ならざ

ミガメの卵を保護 山」の記事で「9月後半 面の「子ガメ誕生か・ウ 鎌倉朝日9月1日号8 れたそうです。 いなかったことが確認さ め10月20日、卵を掘り出 ましたが、台風が来たた 低かったためか」 したところ、ふ化できて いおさい博物館の

鎌倉桜を植樹地元文化人が 歴史文化交流館

ら「桐ヶ谷桜」

の桜を と呼ば

る君

ヶ谷が原産である

ことか

鎌倉桜は、材本

企の桐

史文化交流館(市内扇ガ 写真は同会提供。 桜の若木2本を植えた= 谷)に樹高約3㍍の鎌倉 表)が10月5日、鎌倉歴 ら桜の会」(高柳英麿代 活動をしている「かまく 歴史ある鎌倉桜の普及 車返し」と呼ばれている。 として植えたとも伝えら でたという故事から「御 を返してその美しさを愛 の前を通った天皇が御車 れている。京都では、桜 れ、足利尊氏はこ 京都御所の「左近の桜」

今井義典さんらが参加 人会議」会員、芸術院会 をかぶせた。 さん、元NHK副会長・ ん、茶道家元・山田宗徧 員で洋画家の大津英敏さ し、金色のスコップで土 文化人の集い「鎌倉文化 植樹には、地元在住の

みの中 をなれ そうし 安曇野の晩鐘響く秋日和 包ひ立ち散りて華やぐ葛の花 コスモスや囁く如く風にゆれ 行合の空にか細き法師蝉 永らへて仕切り直しや秋彼岸 かき鳴らすギター昭和の秋灯下 冬を待つ用意暇なり少しづつ長湯してちちろに心ゆだねたり 化粧坂迫る岩根に紅葉かな 行先は国会前や神の旅 茶飯事に追はるるばかり秋夕映え (地) 朴落葉驚くほどの音たてり 〈天〉湘南にヨットが揃ふ白と青 **霜月に父を偲んで経を読む** 屋浅間色くっきりと秋桜 ただの浅間ではなく、遠浅間で距離がでた。 浅間色くっきりと秋桜 本鵠沼秋彼岸で我が身を振り返るのが面白い。

鎌 倉 朝 E 歌 壇

羽音たて川面飛び立つ黒き鵜に朝の光の鋭く射しぬ 片瀬 中村 選 喬

さやかなる秋の朝の参道の梢を抜けて高き空見ゆ的確な描写によって景が浮かびあがる。

「参道の梢を抜けて」という措辞により秋空が見える。 逗子市 木村

命日に手を合はせれば線香の煙の向かうに母の声する 葉山町 近藤美知子

亡き母御を恋う姿が彷彿と浮かぶ。

紅玉の林檎届きて旧友の田舎なまりにふるさとを見る 生まれ来る命思いて胴着編むわが指先のぬくもりてゆく 大船 小笹岐美子

葉山町 近藤

虫のみの静けき夜も漂へる金木犀の香に酔ひにけり 軒先にカネタタきおりて鐘を撞く遥けき亡夫と思い交わ 東慶寺の山門入り来る少女らはスマホ片手に高き声あぐ 昨夜もまた狸迷ひ来てわが庭に鉢合せせり帰宅の夫と そらみみか濃霧の彼岸に呼ぶこゑす枕辺にまたあらはる 鵠沼桜が岡 一色千穂子 七里ガ浜鳴 笹目町 出蔵かおる 堂 柳 石川。野子 尚久

稲刈りて山裾里に迫りけり稲架陣構へ長城のごと 紀政

朝 曰 俳

鎌 倉

〈人〉雨戸閉ぢまた開け月のほのあかり 植木 風見 玲子 月を待つ、見る、というのは心が動く。臨場感あり。 湘南という地名が内容に負けずに力強く使われていた。
| 入湘南にヨットが揃ふ白と青 | 腰越 大川 昭子 大きな朴落葉の「ばさ」という音も伝わってくる一句。
や)朴落葉驚くほどの音たてり 大船 添田 洋子 高士 選 槇野あさ子

鵠沼桜が岡 葉山町 岡本 出蔵かおる 雨宮 夏樹 小美野京子高口 道宏 犬近 丸 藤 森田 一色千穗子 犁 満喜